

キーワード：デジタルシティズンシップ教育へ向けて、教員の学びとアプローチ

## I 研究について

### 1 本年度の研究のテーマ

研究テーマ「教職員の専門性の向上からの情報モラル教育へのアプローチ」

本校は、一昨年までに ICT の研究校に指定されており、生徒たちは端末の活用になれている。そうした中で課題も見られる。情報モラル教育を進めるにあたり、まず実態調査を行った。教師アンケートからは、①授業中に関係のない WEB を見ない等の WEB 制限意識、②友達のコメント記述の仕方、③画像の使用・肖像権等の権利について、大きく 3 つの課題が挙げられた。生徒の家庭生活を含めた場合では、90%が「ネット依存が問題である」と答え、続いて「SNS のコミュニケーショントラブル」も多かった。一方、情報モラルの指導については、70%が「何らかの場面で指導を行ったことがある」と答えたものの、教師側が情報モラルについて知る必要があるということが一番の困りごととして挙げられた。保護者のアンケート結果からは、一番の困り度は長時間利用が挙げられ、続いて SNS トラブルとネットからの影響であった。

そこで、1 年目の研究として、教職員が情報モラルについての専門性を高め、課題である生徒のネット依存や SNS 活用への指導のあり方について研修を進めることとした。

また、課題に対して外部の関係機関と連携を図り、本校教職員の指導力向上を目指すこととした。

### 2 取組の方向性と実践概要

#### (1) 取組の方向性

- ① 実態調査を大切にし、課題を基にした指導を進める。
- ② 校内で情報モラル教育への理解を深められる研修の機会を設定する。
- ③ 研修等で学んだ手法等を生かしながら、情報モラル教育の授業実践を行い、互見することで情報モラル教育の指導のあり方を考えていく。

#### (2) 年間の実践概要

6 月：実態調査①（教師対象）

7 月：実態調査②（生徒・保護者）

・第 1 回校内研修「塩田真吾先生の NITS 動画」について

8 月：新地町研究協議会研修への参加

・第 2 回校内研修「久里浜医療センター研修」への参加（代表 1 名）

9 月：第 1 回校内授業研修会 第 3 学年 道徳科授業

・地区別研究協議会での実践発表

12 月：第 2 回校内授業研修会 第 3 学年 学級活動授業

2 月：地区別研究協議会での実践発表

### 3 情報モラル教育に向けての校内の組織体制について

情報モラル教育を進めるにあたり、第 1 学年～第 3 学年の中から各 2 名の教員を情報モラル推進委員とし、活動の方向性を協議し進める役割を担った。本年度は①実態調査に向けてアンケートの作成、②各授業研修会の運営、③端末使用についての話し合い等について取り組んだ。

### 4 次年度以降への見通し

本年度の研究は、教職員の情報モラル教育への専門性を高めながら指導の第一歩を進めることに重点を置いた。今後情報モラル教育は未来の社会につながるものと捉え、社会をつくる一員としての個々のマナーの意識やリスクを回避する力などの育成をしていきたい。

## II 研究の実際について

### 1 校内での実践

#### (1) 実態把握へ向けての取組

情報モラル教育を進めるにあたり、実態をつかむことを大切と考え実態調査を行った。その方法として自校作成のアンケートを使用した。

#### ① アンケートの作成について

Google フォームを活用し、教師用・保護者用・生徒用のアンケートを作成した。質問項目は、経年比較ができるように校長会で実施している「情報アンケート」をベースに項目立てをした。情報モラル推進委員会を中心に考えたものを、学年会に下ろし、教師の意見の吸い上げをしながら作成を進めた。

#### ② 実態調査の結果について

教師・生徒・保護者へアンケートを実施しその結果、次のような傾向が見られた。

##### 【教師の困り度】

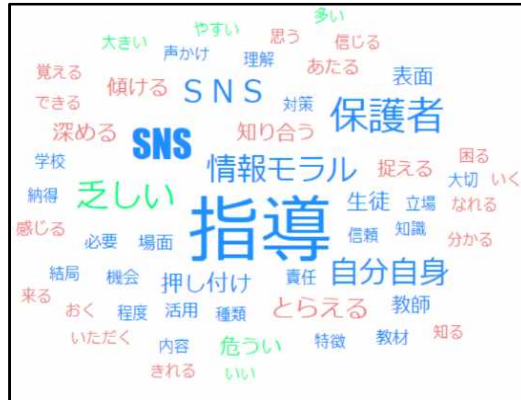
- ・ 情報モラル教育の指導の必要性は感じているが、どのように指導をすればよいか分からない。
- ・ 教師の9割が生徒のネット依存に問題があると捉えており、続いて SNS トラブルへの課題意識が多く見られた。

##### 【保護者の困り度】

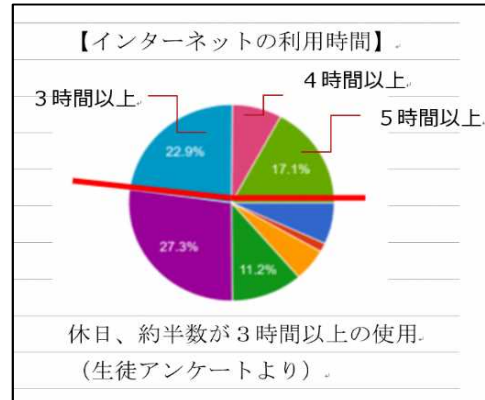
- ・ 長時間利用への困り度が一番高く、続いて SNS トラブルとネットからの影響（ネット上の人物に会う、人格や健康への影響に対する不安）が多く見られた。

##### 【生徒の実態】

- ・ 7割の生徒がインターネットにつながる自分専用の機器を所持している。
- ・ 動画視聴や LINE に多くが利用している。
- ・ 平日5時間以上の利用者も見られ、休日にはその人数は3倍になる。



(教師の困り度のテキストマイニング)



(利用時間の認識は保護者も同様)

#### (2) 校内研修の取組

第1回校内研修において、静岡大学教育学部准教授塩田真吾先生のNITS研修動画「情報社会に主体的に参加する態度を育む指導」を視聴した。研修の形態はGoogle Classroomに動画リンクを貼り、夏休みの一定期間内に動画を見て、その後アンケートに答える形で行った。動画は20分程度で、実施のアンケートからは、「カード分類比較法や情報モラルのポイントを知ることができた」「情報モラルについて、考えたりルールを決めたりするだけではないという点が理解できた」「自ら考えて行動させていくことが大切であると知った」など、視聴して良かったという感想が多く見られた。

## 2 校内授業研修会での実践

### (1) 第3学年 道徳科「情報モラルと友情」の実際

- ① 主題名 情報モラルと友情
- ② 教材名 「合格通知」(新訂 新しい道徳3 東京書籍)
- ③ 本時のねらい

自分の行為が自分や他人にどのような結果をもたらすか深く考え、その結果に責任をもとうとする態度を育てる。

6月に実施した実態調査の結果より、ネットに接続できる自分専用の端末をクラスの95%の生徒が所持している。またそのうち約6割がLINEなどのSNSを利用しており、トラブルに悩んだ経験のある生徒も少なくない。知らぬ間に他人に迷惑をかけた、相手を傷つけたりすることが生じている。

中学生の時期、自主的に考え行動することができるようになる一方、自分の行為が他人や自分自身にどのような結果をもたらすかということ深く考えることができない面もある。自分にとっても他人にとってもよい行為になるよう、その行為が及ぼす結果について深く考え、責任を持つことができるようにしたいと考え授業を設定した。ねらいに迫るため、「自分ごと」として捉えさせるために3つの手立てを講じ授業を進めた。

#### ④ 授業の実際

【導入】 Google フォームを活用し、携帯電話やスマートフォンについてのアンケートを実施し、学級の実態把握を行った。即座に結果がモニターに提示されたことにより、生徒は題材を自分ごととして捉え、興味・関心を高めていた。

◆自分ごととして捉えるための手立て1：アンケートの活用 **資料1**

【展開】 資料の範読後、SNSに合格通知の写真を掲載したことからどのようなトラブルが起きたかを確認し、SNSの利用について着目をさせた。SNSでの写真やコメントがどのようなリスクがあるのか、「SNSノート静岡」の教材を利用し、カード分類比較法を用いて考えさせた。使用させているカードの内容は生徒にとって身近なものであり、細かいところまで見て、なぜそれが危険なのか根拠をもちながらリスクの比較を行っていた。

個人の活動後はグループになり、どのような分類を行ったか根拠も示しながら発表した。最後はクラス全体で、教師の発問を軸に対話し、多角的に考えることへつなげた。

◆自分ごととして捉えるための手立て2：カード分類比較法の活用 **資料2**



【終末】 自分自身を振り返る時間を十分に確保し、自分の考えたことを振り返りシートに記述させた。

◆自分ごととして捉えるための手立て3：考えたことの記述(自己との対話)

### (2) 第3学年 学級活動 「情報モラルについて考えよう」の実際

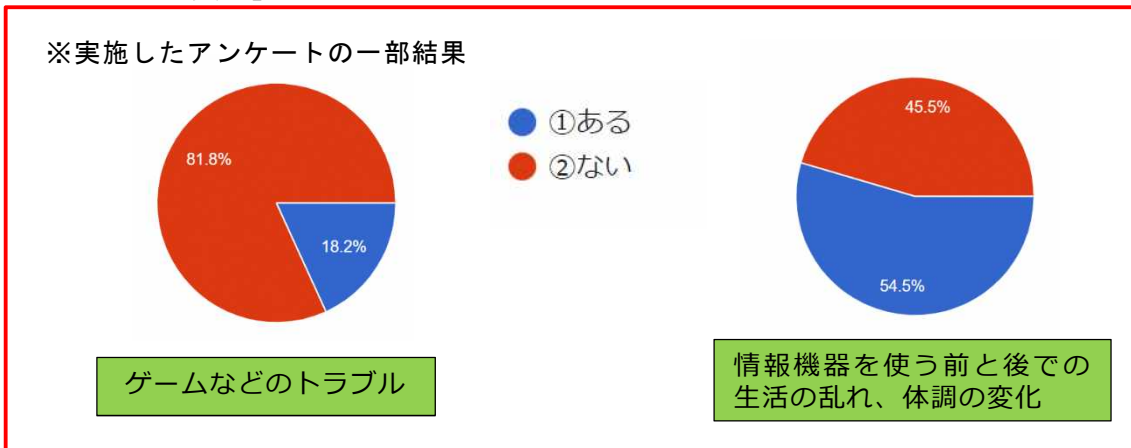
- ① 単元名 情報モラルについて考えよう
- ② 教材名 「情報機器を上手に使いこなそう」
- ③ 本時のねらい

身近な情報機器のより良い使い方について、メリットやデメリットを知り、安全かつ健康に留意しようとする態度を育てる。

3年生の実態として情報機器を身近なものとして多くの生徒が利用しているが、一日のゲーム等の利用時間が3時間以上と依存傾向の生徒も見られる。昨年度においてはLINEによるコミュニケーショントラブルも見られた。4月から高校生になり情報機器の利用頻度はさらに上がることが予測される。様々な情報・情報機器に振り回されるのではなく、安全に使用していく態度を育てていくことが大切と考え、学活において情報モラルの授業実践を行った。

④ 授業の実際

【導入】 事前に実施したWEBアンケートの結果を利用し、クラスの実態を確認した。情報機器の所持率は77%で全国平均程度の数値であった。利用時間は、平日3時間以上の生徒が見られ、ゲームなどのトラブルについては、2割弱の生徒が「ある」と回答した。「情報機器を使う前と後での生活の乱れ、体調の変化」は54.5%と半数以上の生徒が乱れたと感じている結果であった。



【展開】 展開では「LINEについてのメリット・デメリット」と「ゲームについてのメリットやデメリット」の2つの事例について考える活動を行った。身近なテーマのため、各班の対話では様々な意見が出された。また友達の発言に共感しながら話をする姿や自分の失敗経験など実体験を話す姿も見られた。班ごとに記録者1名がスクールタクトを利用し意見をまとめ、それを教室モニターに映しクラス全体で共有した。



※赤枠：メリット 青枠：デメリット  
LINEもゲームもデメリットが多い結果であった。

展開後半では、対話を通して感じたことの記述を行った。「メリットよりデメリットの方が多いのに依存してしまっている」「健康への被害がでるためルールを決める必要がある」「使用限度を考えなければならない」などの意見が多く見られた。資料の真ん中の文章は、過去にゲームで多くの課金をしていた生徒のもので、実体験を振り返り書かれている。このようにそれぞれが対話を通し、自己の生活を見つめ考える時間になった。

～展開後半 授業で感じたことのまとめ～

4 授  
 メリットよりデメリットの方が多いのに依存してしまうあたりゲームは恐ろしいと思った。他にもLINEによるトラブルなどが多いのでデメリットをうまく利用してデメリットを避ける使い方が大切だと思った。

4 授業を終えての感想  
 最近自分も理解してきてゲームと勉強の時間の区別がつけれるようになったけど、このようなことを理解できていないと将来が入学、生活リズムが崩れてしまうと思う。使用限度を考えることも必要だと思いました。積極的に活用できるようにしたいと思いました。

4 授業を終えての感想  
 LINEやゲームなどのインターネット中心になってしまったり依存になったり体調不良になってしまうなどの自分自身に悪影響をおよぼしてしまうのでインターネットを使うさいは、ルールを決めて使いたいと思いました。

【終末】 LINE アプリは、東日本大震災に翻弄されている日本人を見て、2011年6月に、韓国人のイ・ヘジンさんが LINE というツールを作成し、情報の共有が安易にできるように開発したという話を聞く。本来 LINE が作られた意味となぜ保護者が生徒にスマホなどの情報機器を持たせているかなどの意味を伝えるとともに、情報機器に振り回されることなく自分の考えや思いをしっかり伝えるコミュニケーションの力を大切にして欲しいと伝えた。教師自身が東日本大震災で生徒と連絡が取れず、また生徒を失うという辛い経験があったので、思いの込められた授業であることが生徒にも伝わり、真剣に受け止める様子が見られた。

### (3) 研究協議会の様子

2回実施した授業研修会後の研究協議会は、静岡大学教育学部准教授塩田真吾先生とリモートでつながり進めた。①授業者自評、②話合いのテーマを決め、Jamboard を活用し話し合う。(学年グループごとに話合い、その後全体への発表)、③塩田先生からの講話という流れで実施した。

【9月17日 道徳科の授業についての研究協議会の様子】

The image shows a classroom with students seated at desks, looking towards a screen. To the right is a Jamboard with various handwritten notes in pink and blue boxes. The notes are organized into sections: '①アンケートを通して...' (Feedback), '②改善点' (Improvement points), and '活動におうじた座席配置' (Activity seating arrangement). The notes discuss the effectiveness of the survey, the clarity of the activity, and the value of the seating arrangement.

- ◆ 教師の話し合いからは、良かった点として「分類するカードの内容が分かりやすく、考えやすかった」「中心発問が分かりやすかった」「アンケートの実態調査が効果的であった」などの意見が出された。また改善点としては、カードを分類した後の個々の意見を共有・対話させていく部分について意見がだされた。
- ◆ 塩田先生の講話より、「情報モラルはトラブルについて『気を付けなさい』と言っても本当に気をつけられるかという疑問であり、『どうやって気をつけさせるか』を考えていかないといけない。『自分事として考えさせることで、どのように気をつけさせていくか』を考えていく必要がある」と話があった。また情報モラル教育は、「モラル教育」と「リスク回避」の2つの領域に分けられるが、この2つのバランスをとって進めていくことが必要であり、今回の授業はそのバランスがよかったと講評をいただいた。

(12月9日 学級活動の授業についての研究協議会の様子)

The image shows a classroom with students seated at desks, looking towards a screen. To the right is a slide with a reflection question in Japanese. The slide is titled 'もう少し考えてみたいこと' (Something I'd like to think about a bit more) and asks '今日の授業で、もっと「自分のこと」として考え、行動改善につなげるためにはどうすればよいだろうか?' (In today's lesson, how can we think more about 'our own things' and take actions for improvement?). It lists two points: 1. Why do merits and demerits arise? (Information's 'Scientific Understanding' side) and 2. 'Dam' is understood, but how can it be improved? (Information's 'Skill' side).

(※右上図は塩田真吾先生のスライドの引用)

- ◆ 教師の話合いでは、「生徒の身近な題材であったため、グループ活動が多角的・多面的な話合いになっていた」「自分の経験と向き合う時間になっていた」「ラストの教師の講話がよく、指導法や道具の使い方以上に、教員として伝えたい思いなどを軸に持つことの大切さを感じた」などの意見が出された。また、「開発元の LINE 担当の方にオンラインで参加して頂き、開発の意図を話して頂くのも良いのではないかと」、広がりのある意見も出された。
- ◆ 塩田真吾先生の講話では、互いの経験を共有するという点でよい機会であったが、行動改善につなげていくためには、より「自分事」して考えさせる必要があり、その具体的な方法を御指導頂いた。

### Ⅲ 成果と課題について

#### 1 成果

- 実態調査により、保護者や教師の困り度や生徒の実態を知ることができ、それを基に指導を進めることができた。
- 校内授業研究会において、静岡大学教育学部准教授塩田真吾先生よりご指導を頂き、カード分類比較法をはじめ、情報モラル教育についての指導のポイントを学ぶことができた。
- 年度始めは組織として動きが取れなかったが、後半は情報モラル推進委員を軸とした、組織としての動きが少しずつではあるができるようになってきた。
- 校内授業研修会を実施した3年生を対象に事後のアンケートを実施したところ、授業後に SNS の利用の仕方を意識し、使い方や生活のリズムが良くなったと感じている生徒が見られた。

#### 2 課題

- 生徒の実態や変容の把握の方法を考えていく必要がある。また、実態調査について、本校自作のアンケートを使用したが、より詳しい分析をして実態を把握できるように、今後は静岡大学塩田真吾先生より紹介された「情報モラル診断サービス」の利用も検討していきたい。
- 3年生対象の事後のアンケート結果から、情報モラルの授業後に SNS の使い方や生活のリズム等で利用の仕方が良くなったと感じている生徒は4割ほど、特に変わらないという生徒は6割であった。この結果より、継続的に情報モラル教育を進めることを大切にしていきたい。
- 情報モラル教育を進めるにあたり、教師の専門性は必要で今後も学んでいく必要がある。校内研修の改善を図っていきたい。
- ICT の環境が変わり、その都度課題に十分に対応ができないなど、組織的に十分動くことはできていない。今後、より組織的に動くことができるようにしていくことが必要である。